

## 巻頭言

# 『人間福祉学研究』 発刊 11 年目を迎えて

関西学院大学名誉教授 芝野 松次郎

関西学院大学 8 番目の学部として人間福祉学部が開設されたのが 2011 年 4 月で、同時に人間福祉研究科も開設された。『人間福祉学研究』創刊号は同年の 11 月に発刊されている。人間福祉学部が発行する定期刊行物には、学部に所属する教員や大学院生、研究科卒業生などが研究成果を発表するとともに、学部の教育研究活動を広報する学部紀要として『Human Welfare』がある。『人間福祉学研究』は人間福祉学研究に関わる学部内外の研究者が最新の研究成果を公表し、社会の評価を得る場であり手段としての役割を担うもので、学部機関誌としての『Human Welfare』とは性格を異にする。学部・研究科開設当初より『人間福祉学研究』には、こうした学術研究誌としての性格付けがなされていた。

初代学部長・研究科委員長として創刊号の巻頭言において、本誌の目的と多くの方の協力を得て学術研究誌としての『人間福祉学研究』を発行することができた時の私の思いを次のように記した。

……『人間福祉学研究』は、研究科及び学部に所属する研究者の成果発表の場に留まらない。社会福祉やソーシャルワークなどに関わる領域、地方自治や経済、社会起業などに関わる領域、スポーツ科学・健康科学や精神衛生、スピリチュアリティの研究などに関わる領域、などなど人間福祉（学）に関連する幅

広い領域の研究者の研究成果を発表していただく場としての役割も果たさなければならぬと考えている。日本全土、さらに海外の研究者からの投稿を受け、公平かつ厳密な査読審査を行って、優れた研究成果を公表していきたいと考えている。そのために学外の多くの研究者のご協力を得て、編集委員会が設けられた。創刊号は、この編集委員の方々の献身的な尽力と、人間福祉学研究に理解を示していただいた研究者の寄稿によって実現したのである。

その後 10 年余りの時を経て本誌には学部・研究科内外の研究者から 50 を超える投稿論文が寄せられ、厳正な査読と編集員会での議を経てその約 6 割の優れた論文が採択され、掲載されている。人間福祉学部・研究科と本誌の趣旨に関心を持ち投稿していただいた方々、そして査読や編集に尽力していただいた多くの方々に心より感謝申し上げます。

編集委員会では、本誌の学術的な貢献と特色をより鮮明にし、より魅力的な学術研究誌とすべく、さまざまな検討がなされてきた。テーマを絞らず研究者に投稿を依頼することを試みたこともあったが、第 3 巻第 1 号より、厳選したテーマを冠した「特集」をスタートすることになった。人間福祉学研究に関わる学術的なテーマや社会的関心の

高いテーマを公募、選考し、編集委員会で認められた人間福祉学部・研究科の教員が責任を持って執筆者を募る「特集」は、研究者のみならず一般の読者にも読み応えのある内容で好評を得ており、本誌に奥行きを与えることとなっている。

これまで特集として取り上げられたテーマは「生と死を見つめ、支える」「地域再生と社会的企業の可能性」「スポーツの力」「東日本大震災後の生活再建に向けて」「日本における“マインドフルネス”の展望」「コミュニティを基盤とした参加型リサーチ（CBPR）の展望：コミュニティと協働する研究方法論」「認知症への多角的アプローチ」「今、なぜ「貧困問題」か——古くて新しい課題」であり、本誌らしい多彩な内容となっている。本11巻は「「福祉の哲学、価値、思想」について」という学問としての福祉の根底に迫ろうとする意欲的な特集となっている。

このように本誌は、所期の趣旨と目的に沿って企画、編集されてきており、一定の成果を挙げてきたと思う。しかし、人間福祉学部・研究科が設立10周年を迎えた今、本誌の今後の10年、さらに10年先のあり方を考えると、見直さねばならない課題は少なくないであろう。

例えば、この数年、投稿論文数が思うようには伸びていないことがある。前に述べたように、本誌が限定的な学部紀要ではなく、開かれた学術研究誌であり、投稿論文は指名された査読委員によって厳正に審査され、掲載された論文は、優れた論文として認められたものとなる。投稿者はこうした本誌の役割を理解し、本誌において最新の研究成果を公表すべく奮って投稿していただきたいと思う。しかし、この本誌の役割と価値が理解されるように十分広報されていないかもしれない。本誌についての広報の仕方について今一度検討する必要がある。

査読者の確保も大きな課題と言える。人間福祉

学研究の範疇はその母体となる人間福祉学部、研究科がカバーする学問領域に基づいており、社会福祉のみならず、地方自治や経済、社会起業、さらに死生学、スポーツ科学に関連する幅広い学問領域を含む。したがって、そうした幅広い領域をカバーする査読者の確保は当初より大きな課題であった。広報により投稿論文数を増やすとすれば、それに対応する査読者の確保は喫緊の課題として取り組まねばならない。同時に査読プロセスの見直しも重要になろう。採択に至るプロセスの曖昧な点はこれまでの経験を踏まえ明確化するとともに、一部電子化することも検討する必要があるかもしれない。

「特集」は、今や本誌のユニークな特色として十分定着してきていると思うが、さらなる充実が期待される。編集委員会に大きく依存しているテーマの募集、選択、特集編集者や執筆者の選任と編集のプロセスを見直し、さらに魅力的な内容となるようにしていただきたい。また、特集テーマからスピノフの形で研究プロジェクトが生まれる可能性もある。こうしたニーズ・シーズを人間福祉学部・研究科がどのように支援できるかも検討する必要があるであろう。特集論文が学術論文として執筆者の業績となるように工夫する必要もある。特集論文が査読論文と同等の評価が得られるような査読の仕組みを導入することも検討する必要があるかもしれない。

本誌が創刊されて10年余りの経過を振り返ると、本誌は所期の目的に沿いつつ一定の成果を成し、学術誌としての役割を果たしていることが確かめられたように思う。人間福祉学部・研究科が発行する質の高い学術研究誌として、本誌がさらに重要な役割を担っていくための課題の一部も確認した。本誌がこれからますます学術界への貢献を高めていくことを願って止まない。